人間文化研究機構「北東アジア地域研究推進事業」
島根県立大学 NEAR センター拠点プロジェクト「近代的空間の形成とその影響」

第2回国際シンポジウム 2017【北東アジア : 胎動期の諸相】

総　括

島根県立大学北東アジア地域研究センター長
井　上　厚　史

1．はじめに

2016年より始動した人間文化研究機構「北東アジア地域研究推進事業」（６年間）の拠点大学の一つとして、本学北東アジア地域研究センター（NEARセンター）は「北東アジアにおける近代的空間の形成とその影響」を研究テーマとして事業を推進している。

近年、アメリカの影響力の地滑り的低下とその反動としての一国主義的トランプ政権の誕生により、中国、ロシアの政治的プレゼンスの増大と衝突、また北朝鮮をめぐる政治情勢の激動が続く中で、日本をとりまく北東アジア地域の政治構造は大きく揺れ動いている。日本にとって、中国・ロシア・モンゴル・韓国・北朝鮮との間で生起している諸課題を解決へと導くためには、この地域を一体的に捉え、あらためて「北東アジア地域にとっての近代化とは何だったのか」を再考する必要性が年々高まっていると言えよう。

こうした認識にもとづき、2016年11月に第１回国際シンポジウム「北東アジア：胚胎期の諸相」を開催し、北東アジア地域の変動の端緒を開いたモンゴル帝国の拡大とその影響について、中国、ロシア、朝鮮、日本、琉球の視点から議論を重ねてきた。

２年目にあたる2017年は、初秋の爽やかな風が吹く中国長春市にある中国東北師範大学にて９月19日、20日の２日間にわたり、第２回国際シンポジウムを開催した。今回は【北東アジア：胎動期の諸相】をテーマとして掲げ、近代化が始まる直前の北東アジア地域の様態をさまざまな角度から検討し、その特徴を抽出することを試みた。白熱した２日間にわたるセッションの概要は、以下の通りである。

シンポジウム・タイトル【北東アジア：胎動期の諸相】

共催：島根県立大学北東アジア地域研究センター（NEARセンター）、国際日本文化研究センター、人間文化研究機構（NIHU）、東北師範大学歴史文化学院、同東亜文明研究中心、同社会科学処、同国際合作・交流処

日程：2017年９月19日（火）～20日（水）

会場：東北師範大学国際会議場（中国・長春）

○９月19日（火）

9:30～9:45　開会挨拶と趣旨説明

挨拶：韓東育（東北師範大学教授）

挨拶：井上厚史（島根県立大学教授）

趣旨説明：井上厚史

9:45～12:30　第一セッション「認識―他者認識としてのアジア」

司会：石川肇（国際日本文化研究センター助教）

S. チョローン（モンゴル科学アカデミー教授）「東方に対するネルチンスク条約における「モンゴル」問題―占拠と解決」

唐艶鳳（東北師範大学）「17～18世紀におけるロシア人の中国観」

澤井啓一（恵泉女学園大学名誉教授）「儒教共栄圏の幻影～十八世紀東アジアのジャポニスム」

黒住真（東京大学名誉教授）「東アジア十八～十九世紀における日本の「霊性」」

討論者：井上厚史

14:00～18:00　第二セッション「統治理念」

司会：劉暁東（東北師範大学教授）

佐々木史郎（国立アイヌ民族博物館設立準備室主幹）「清朝のアムール支配の統治理念とその実像

ソドビリグ（内モンゴル大学教授）「清朝の対モンゴル政策「因俗施治」の19世紀における遭遇」

韓東育（東北師範大学教授）「清朝による「非漢世界」に対する「大中華」表示―＜大義覚迷録＞から＜清帝遜位詔書＞まで」

庄声（東北師範大学准教授）「ダイチン・グルン時代の統治領域の地理的特性とその災害救援政策―東北南海琿春河流域を中心に」

眞壁仁（北海道大学教授）「江戸儒学界における清朝の領域統治をめぐる評価」

討論者：岡洋樹（東北大学教授）

○９月20日（水）

10:00～12:30　第三セッション「交流―“人と物”」

司会：李暁東（島根県立大学教授）、娜荷芽（内モンゴル大学講師）

森永貴子（立命館大学教授）「1860年代以降におけるロシアと清の茶貿易―モスクワ、キャフタ、漢口を結ぶ流通の視点から」

中村篤志（山形大学准教授）「清朝治下モンゴル社会における人の移動と駅站」

波平恒男（琉球大学教授）「琉球人の近代西洋との最初の出会い―バジル・ホール著『朝鮮・琉球航海記』（1818）を中心に」

石田徹（島根県立大学准教授）「近世対馬における異国船来着とその対応―対馬宗家文書から考える「北東アジア」」

討論者：劉建輝（国際日本文化研究センター教授）

14:00～17:00　総合討論

司会：井上厚史

討論：小長谷有紀（人間文化研究機構）、韓東育、劉暁東、黒住真、張寅性（ソウル大学教授）、黄克武（台湾中央研究院教授）

17:00　閉会

シンポジウム終了後、各セッションにおける質疑応答および総合討論の内容をフィードバックした発表者による修正原稿の提出がなされた。以下、シンポジウム当日の議論および修正原稿の内容を踏まえながら、第２回国際シンポジウム【北東アジア : 胎動期の諸相】の成果を総括したい。

２．近代化胎動期の北東アジアと「大中華」

２日間にわたったシンポジウムは、「北東アジア：胎動期の諸相」という共通テーマのもと、第一セッション「認識―他者認識としてのアジア」、第二セッション「統治理念」、第三セッション「交流―“人と物”」という３つの視点から、全部で13本の発表と質疑応答があった。今回は、本学NEARセンターと学術交流協定を締結し、NIHU北東アジア地域研究の中国リエゾンオフィスを開設してくださっている中国東北師範大学での開催となったために、参加者はごく自然に「中国東北部から見た北東アジア」を意識しながら、北東アジア地域における近代化「胎動期」（すなわち17～19世紀）に生起した変動を考察することとなった。

今回の発表の中で最も重要なものは、東北師範大学の韓東育先生による「清朝による「非漢世界」に対する「大中華」表示―＜大義覚迷録＞から＜清帝遜位詔書＞まで」という問題提起であっただろう。そこで提起された問題とは、近代化胎動期の中国において新たに創出された世界観＝統治原理（「大中華」）が同時代の北東アジア地域にどのような思想的変動をもたらしたのかを検証する必要があるというものである。

韓東育先生によれば、清朝を成立させた清人は「夷」から「夏」への身分変化を実現し、漢民族の支持を得ると同時に、「華夷一家」を中心とする「中華大義」をさらに発展させ、

モンゴル・ウイグル・チベット、西南地域の諸民族の「非漢民族世界」であっても「大中華」に含まれるという共通認識を完成させたという。確かに、清朝が成立したときの統治原理は朱子学にもとづくものであり、朱子学で「天理人倫の有無により「人獣」の基準が明らかに分かれる」とされる以上、理論的に出自は問題ではなく、非漢民族の清人（女真族、満州族）であっても「天理人倫」を有していれば皇帝になることは正当化されうる。

しかし問題は、統一者＝皇帝としての清人の自己認識が、「大中華」という拡大した「中華天下」に包含された「満」（東北部の満州・モンゴル・漢の一部分）、「漢」（中国内地）、「藩」（モンゴル・チベットとウイグル地区）で構成される広大な地域に住む諸民族の世界観、あるいは自己認識にどのような影響を与えたかということである。

『大義覚迷録』に収録された曽静の反清的言説に対して、清人は「辺境に生活する各民族の自尊心を容易に傷つけ、さらには恨みをも招く」ことになったと言われるように、中国における清朝の成立は、当然のことながら、周辺諸国に大きな思想的課題を突きつけた。朝鮮や日本にとってそれは「華夷変態」として問題化され、その後西洋による近代化の大波が押し寄せてきた時にも近代化＝西洋化の是非をめぐる問題とともに、改めて「華夷変態」した中国をどう認識すべきかについて議論が巻き起こったことは周知の通りである。

韓東育先生は大中華と小中華を比較して、「清朝が後人のために残した「大中華」の前では、明朝および明以前の「小中華主義」の回復については、どのようにそれを提唱し、展開させようと試みても、その意義には限界があることは明らかである。たとえ、「華夷変態」の輿論が、かつて異地域の「民族主義」を促進させる起爆剤として大いに利用されたとしても、それは、東アジア地区の近代における「国家主義」の孵卵器として「悪用」されるものなのである」と指摘するが、ここにこそ北東アジア地域の近代化を考える際の極めて重要な問題が提起されているように思われる。なぜなら、「大中華」が提唱されたからこそ「小中華」が誕生したのであり、そして「小中華」が近代における国家主義の「孵卵器」の役割を果たしたとするならば、なおさら北東アジア地域における「小中華」意識（＝国家主義）の成立と近代化＝西洋化のプロセスは輻輳したクロス現象だと考えられるからである。

一方、清朝が一貫して堅守し続けた「中華大義」は、中国国内においてはどのような政治的プレゼンスを有していたのだろうか。庄声「東北南海流域における異常天候と救済措置―乾隆十五年琿春地方の事例を中心に―」は、漢文文献ではなくマンジュ語で記された檔案文書を解読した結果、ダイチン・グルン（大清国）時代に図們江下流域に位置する琿春地方は山に囲まれた水資源が豊かな地方であったが、乾隆十四年から三年間水害が続き、穀物収穫量が甚だ減産状態にあった。そのため「毎年半分近くの人口は食糧の援助が必要となり、その援助に使われる食糧は、琿春地方で設置された義倉の貯蔵分からの供給にあたり、これは琿春地方において唯一の援助するところ」だったことを明らかにしている。

乾隆十一年十月、清朝は地方の大吏に命じ、民間を勧導して広く義倉を設けることを通達（諭令）した[1]。それを受けて、乾隆十八年に方観承によって「義倉規条」が作成されたが、その特徴として、①個々の義倉の設立をばらばらに奨励するのではなく、既存の村落分布に対応して設けさせたこと[2]、②小さな農業集落にまで義倉が建築されていることから、農村地帯を含む一般的な人口の濃密化に対応しようとしていたこと[3]、が指摘されている。大規模水害が発生しやすかった琿春地方における義倉の設置は、清朝が都市部だけでなく「辺境に生活する各民族」をも救済しようとした政策の一端を示すものであろう。「中華大義」は、対外的なスローガンではなく、拡大した広大な領土（大中華）内部の隅々にまで浸透されるべきスローガンとして機能していたと思われる。

では、こうした清朝による「大中華（中華大義）」の提唱は、北東アジア地域にどのような外交的政治的反応を引き起こしたのだろうか。まず、ロシアとの関係から考えてみよう。

３．ロシアと「大中華」

唐艶鳳「17～18世紀におけるロシア人の中国観」は、ロシア人の中国に対する最初の認識がモンゴル統治時期の「不明で神秘な東方国家」という模糊とした概念から始まったが、その後17世紀初めからのロシア政府の初の公式使節団および18世紀始めのロシア正教布教団の活動をきっかけとして、西洋における「中国ブーム（中国趣味）」がピョートル１世の西欧化改革によってロシアにも伝えられ、「中国の精神文化および中国イメージが推賞されるとともに意図的に醜化させることもあって、ロシア人が中国に対する認識の視点はさらに多元化し」ていったと指摘する。とりわけ、ロシア人の中国に対する関心は「広大な極東地域」にあり、その主な目的は貿易による利権獲得と領土獲得であったという。

では、こうした関心から中国の極東地域への進出を図ったロシアは、清朝が提唱した「大中華」をいかに理解していたのだろうか。考えられるのは、ロシアにとって都合の良い「寛容なる領土主義」として歓迎したか、あるいは「大中華」の提唱を無意味なスローガンとして無視したかのどちらかである。

佐々木史郎「清朝のアムール支配の統治理念とその実像」は、これまであまり注目されてこなかった中国王朝の北東アジア地域への政治経済的な影響を、アムール川流域から樺太におよぶ地元住民の立場から明らかにしようとする意欲的な論文である。佐々木先生に

１　松村祐次「清代の義倉」、一橋大学研究年報『人文科学研究』11号、一九六九、八二頁。
２　同、八九頁。
３　同、九九頁。

よれば、清朝政府はこの地域に、住民を原住地から移動させて強制的に八旗制度に組み入れる「徙民（しみん）政策」と朝貢制度を使って住民を地元に残したまま間接統治する「辺民政策」という、二つの制度によって統治していた。「辺民政策」は基本的に中国の朝貢制度に則ったものであり、クロテンなどの毛皮が貢納品として献上すれば、皇帝の庇護下にあって、見返りに莫大な恩賞が与えられた。そして、「清がアムール川下流域と樺太で展開した辺民政策、辺民制度はサンタン交易の隆盛という副産物を生み出し、18世紀から19世紀にかけて、中国東北地方からアムール川流域、樺太、北海道を経て、本州にいたる長大な交易路が出現した」という指摘は興味深い。

清朝による「大中華」を謳った統治体制の周辺部に位置したアムール川下流域や樺太において、ロシア、中国、日本にまでおよぶ長大な自由交易路が現出していたということは、ロシアにとって（また日本にとっても）清朝が唱える「大中華」の政治的および理念的拘束力はきわめて緩やかなものであったことを意味しているだろう。実際、この地域では清朝の警察権や司法権は行使されていなかったらしい。こうした実証を積み重ねた上で、佐々木先生はこの地域における清朝の支配は、「統治」と呼べるものだったのだろうかという重要な疑問を投げかけている。

> 清のアムール川流域と樺太に対する支配は、「統治」（ruleまたgovernance）と呼べるものだったのだろうか。実はこの種の議論はまともに展開されたことがない。「ロ清関係史」あるいは「日ロ関係史」という従来の歴史学の枠組みでは、外交、軍事などに関する政府間の細かい交渉の過程や、19世紀後半以後急速に多数派化した移民どうしの関係性などについては数限りなく議論されてきたが、いずれも同じ時代に「先住民族」化した地元住民の動向には全く触れられない。彼らは人類学者や民族学者の研究対象であり、歴史学の対象とはされてこなかった。

「北東アジア地域における近代的空間の形成」という本研究プロジェクトのテーマの考察においても、また清朝が掲げた「大中華」という世界観＝統治理念の検証においても、ここで指摘されている「19世紀後半以後急速に多数派化した移民どうしの関係性」に注目することは大変重要な問題視角である。そして、この地域における支配とは、「国家が土地の支配を重視し、「領土」、「国境」という概念を国民に普及、認知させ、その土地の資源を開発するために、領土の別の場所から移民を連れてきて人口構成を劇的に変えてしまうような、近代国家の政策とは対照的である」という指摘も、今後このプロジェクトを推進させていく上での大きな示唆となるものである。

森永貴子「1860年代以降におけるロシアと清の茶貿易―モスクワ、キャフタ、漢口を結ぶ流通の視点から」も、これまで注目されて来なかった中ロ間を移動していた商人たちの動向、すなわち1860年代から清朝中国に進出して製茶業を行ったロシア商人の活動を

追跡した意欲的な論考である。物々交換によるバーター取引（貿易）として発達した茶貿易（キャフタ貿易）は、中国側からは山西商人が参加し、ロシア側からは北ロシア、中央ロシアを中心に多くの商人が参加したが、中でも「資金、数においてモスクワ商人が主導的な位置を占めた」という。その後、太平天国の乱（1853－64）をきっかけとして銀による自由取引へと転換し、さらに1858年のロシアによる沿海州併合によってシベリア商人の目は一層極東へと向かうことになった。そして、1860年代以降は、漢口、上海、天津、キャフタ、イルクーツク、モスクワを結ぶ貿易ルートを重要な基礎としつつ、1870年以降は海路輸送を拡大していったが、この広大なロシアの茶貿易網はロシア革命を期に突然終焉したという。

森永先生の指摘で注目されるのは、「ロシア帝国の商人たちの経済ネットワークのグローバル化」という視角と、製茶業に関する「急激な技術・製造業の近代化とヨーロッパ化」が同時進行していたという分析である。北東アジア地域における近代的空間は、商人ネットワークによる技術移転によっても徐々に整序されていたという指摘は、見過ごすことのできない重要な問題提起である。

４．モンゴルと「大中華」

S・チョローン「ネルチンスク条約における「モンゴル」について：領有、決定」は、これまで「史学研究の外に置き去りにされてきた」感のある1689年にロシアと清朝の間で締結されたネルチンスク条約について、原資料（石に刻まれた漢文のロシア語訳）を丹念に検討しながら、モンゴルの立場からネルチンスク条約の持つ意義を再考したものである。チョローン先生によれば、「セレンゲ、バイカル、ダウール地域における管轄問題と、モンゴルにおける要塞の建築」という「モンゴル問題」が大きな懸念として露清間に横たわっており、「モンゴル人の影響力が小さくなっていたとはいえ、露清間の仲介や、管轄民をめぐる対立、先住民の管轄問題、貴族間の同盟、帰順行為といったモンゴル人に関連する諸問題が、この条約をめぐる活動と密接な関係にあった」ことが力説されている。

一般的に、清朝の軍事的優越を背景にして国境等が策定されたと評価されてきたネルチンスク条約だが、そこに実は「モンゴル問題」が介在しており、露清間でモンゴル問題が取り上げられるたびに、モンゴル人の介入が慣例化していたという指摘は、胎動期北東アジア地域におけるモンゴルのプレゼンスを改めて思い起こさせる重要な指摘である。

ソドビリグ（蘇徳畢力格）「清朝の対モンゴル政策「因俗施治」の19世紀における遭遇」は、満州人である清朝が漠南（内蒙古）・蒙古に住むモンゴル族を統治したときの原理である「因俗施治」と、内地人がモンゴル地区に勝手に移動することを禁じた「辺禁」制度に注目しながら、清朝のモンゴル統治のあり方について資料にもとづきながら詳細に分析した論考である。

ソドビリグ先生によれば、1840年のアヘン戦争に象徴されるように、19世紀になると

「内乱」の多発と「外患」の接近により、西北の辺境地区における清王朝の統治秩序は「大きな衝撃と破壊を受け」ることとなった。たとえば、欽差大臣に任命された左宗棠は新疆とモンゴルの密接な依存関係を強調し、新疆の行省設置を清朝政府に願い出た。また、張之洞はロシアの脅威を強調し、対ロシア防衛力の強化のために、従来のモンゴル統治の方針に反する徴兵屯田制や開墾の権利さえもモンゴルに認めるような提議まで行っている。

こうした一連の改革案の提示とそれへの反動や政策の混乱の中で、「清王朝は、漢民族が自由に出関することを制限していたが、万里の長城の内外が統一されている「大一統」局面の中で、この制度をもって、内地の漢民族がモンゴル地区に行って生計を立てることを完全に禁じることは難し」かったという指摘は重要である。「大一統」、すなわち「大中華」という世界観＝統治理念による実際の統治は、実は領域内における民族の自由な交流や移動を促し、清朝の対モンゴル政策である「辺禁」は次第に形骸化し、「辺境と内地が一体化し、外藩蒙古と行省の境目が曖昧になりつつある新しい」時代＝近代を迎えていたという。「大中華」というスローガンは、もはや内破する寸前の状態にあったというべきであろう。

中村篤志「清朝治下ハルハ＝モンゴル社会における人の移動と駅站」は、17～19世紀清朝治下のハルハ＝モンゴルにおける人の移動を、駅站の運用実態に着目しながら考察した論考である。中村先生は、清朝がモンゴル、チベット、新疆などの「広大な非中華世界の統治がなぜ持続したのかという問題は、近現代の東アジアを考える上でも重要な課題」であると指摘する。なぜなら、近年の現地一次資料を用いた研究成果によって、「清朝制度とは次元を異にする、旗の自律的社会構造が明らかになって」おり、清朝がいかにして自律的なモンゴル社会を統治したのか、そしてモンゴルはそうした清朝の支配をどのように受容していたのかが未解明だからである。これはすなわち、ソドビリグ先生同様、「大中華」という世界観＝統治理念が対モンゴルにおいてどのように機能していたかを考察する上で重要な問題提起である。

『四部アルバ分配冊』の詳細な分析により、中村先生は「清朝によって越旗遊牧を禁じられたとされる当時のモンゴル社会において、その清朝自らが設計した統治制度によって、人々が郷里を離れ往来する機会を得ていた」という。また、「駅站自体が、他地域・他民族の人やモノ・情報が集い混じり合う結節点」として機能していたことを考慮するならば、ソドビリグ先生が指摘する清朝の対モンゴル政策である「辺禁」政策の形骸化は、駅站という交通＝交流システムの発達によってもなしくずし的に進行していたことになるだろう。

ロシアからの脅威への対応、そして駅站という物流システムの発展による「満・蒙・漢・露」人の頻繁な往来＝交通によって、「大中華」的世界観の辺境に位置するモンゴル社会は、清朝による厳格な統治システムの支配下にあったのではなく、自律的社会構造を有していた。とするならば、当時統治理念としての「大中華」はもはや有名無実化していたと

言えるのではないだろうか。

５．日本と「大中華」

澤井啓一「儒教共栄圏の幻影――十八世紀東アジアの＜ジャポニスム＞」は、北東アジアの極東に位置する日本が同地域の近代化胎動期においていかに認識され、またその日本で始動していた「近代国家」建設の様相を、「ジャポニスム」と「儒教共栄圏」という二つのキーワードによって分析した論考である。前者は、「大中華」という世界観＝統治理念の中で「日本」が浮上してくる過程で生じた＜まなざし＞を問題とし、後者は、満州人が建国した中国＝清朝を朝鮮や日本の儒者がどのように認識していたかという＜ナショナリズム＞を問題とするものである。

澤井先生によれば、朝鮮通信使の往来を通じて、18世紀の日本人の漢文能力の向上と「新たな儒教」（伊藤仁斎や荻生徂徠系統のいわゆる古学派）の台頭が朝鮮の儒学者によって発見されるとともに、明朝で生まれた文化の「大衆化」の潮流が日本にも波及し、浮世絵をはじめとする日本の大衆文化が朝鮮や中国に逆輸入され、それが次第にヨーロッパにおけるジャポニスムの隆盛をもたらした。古学派の台頭は、「野蛮な日本に文化が芽生えた」という認識をもたらしただけでなく、それが「大中華」の正統的学問である「朱子学の否定」を含む考証学的な学術的基礎を有するものであっただけに、朝鮮の「小中華意識」を大いに刺激することになった。そして、それは同時代の潮流となっていた西洋科学技術を翻訳を通して学ぼうとする「北学」（あるいは「洋学」）運動と連動しながら、「＜ジャポニスム＞に端を発しながらも、日本ばかりでなく、中国を入れた東アジア全域を対象として、そこに朝鮮を先導役とする、思想・文学全般に及ぶ儒教文化の交流圏」が成立しかかっていたと指摘する。

胎動期北東アジアの極東に位置する日本で生まれた新たな文化運動は、正統的学問である朱子学の否定という当時の絶対権威（「大中華」）をゆるがすような過激な文化運動であった。それは朝鮮の儒学者を驚かせるとともに、彼らのナショナリズムを刺激し、さらに新たな「儒教文化の交流圏」を生み出す可能性をも内包するものであった。中国や朝鮮における北学の隆盛と東アジアでいち早く近代国家建設に舵を切った日本における過激な文化運動は、たがいに呼応し合いながら、単なる文化趣味である＜ジャポニスム＞を超えて、その後の北東アジア地域に大きな影響を及ぼす世界観あるいは統治理念の胎動を意味するものであったと考えられる。

黒住真「東アジア18～19世紀における日本の「霊性」」は、この時期における日本の新たな文化運動を「霊性」という言葉に焦点を当てながらその特性を解明しようとした論考である。江戸時代の伊藤仁斎、荻生徂徠、堀景山、山県大弐、本居宣長、平田篤胤等のテキストを分析した後、黒住先生は明治維新後に誕生した五箇条の御誓文、大日本帝国憲法、教育勅語、組合、講、社会民主主義関係のテキストを分析してみると、そこには「国家宗

教ないし国家神道というべき中心的宗教のそれ自体の擬似無宗教化と諸々の宗教の宗教的組織として結集が求められ」ていることが分かり、そしてそれに随順する道徳や「日清戦争・日露戦争をはじめとして対外観とそこへの拡張の意識」が形成されていたと指摘する。そして、近世の18～19世紀に「霊性」をめぐって顕在化してきた言説は、明治維新後には対外関係、天地、天皇、国家の４つの領域において近代天皇像に集約されていくという分析は、澤井先生が析出した「儒教文化の交流圏」形成の可能性を裏面から補足するものであろう。

近代胎動期北東アジアの極東という辺境地帯において、それまでには見られなかった「大中華」ではない新たな世界観、あるいは政治的・文化的ヘゲモニーが徐々に形成されつつあったように思われる。

６．接壌地域と「大中華」

波平恒男「琉球人の近代西洋との最初の出会い―バジル・ホール著『朝鮮・琉球航海記』（1818）を中心に―」は、中国と日本の接壌地域（コンタクト・ゾーン）に位置する琉球から、琉球人と西洋人との出会いがどのようなものだったのか、またそれを今日どのように読むかについて考察した論考である。波平先生によれば、ホールが琉球人の持つ寛大さや正直さを高く評価した背景には当時のイギリスで支配的だった「アダム・スミス的、近代的な道徳観」が関係しており、そうした「近代的道徳観」から見た時、「一方には尊敬と信頼が、他方には思いやりとやさしさが存在するようにみえる。われわれがもっとも注目した中国と琉球の相違は、この点であった。中国においては上下の階級の間に、いかなる種類の寛容も、友好的な理解も認められないのである」という。中国と琉球を対比的に描いているホールのこの言説は、琉球の位置づけを象徴的に表している。

西洋列強による清朝中国の征服が先鋭化する時代状況の中で、なぜ「大中華」の接壌地帯にあった琉球が西洋人によってことさらに非中国的に描写されたのだろうか。「発見の時代」から「帝国主義の時代」へという近代化胎動期の北東アジアにおいて、琉球における反「大中華」的道徳観への西洋人の注目は、日本における反「大中華」的な文化的政治的運動の興起とともに、清朝中国が打ち立てた「大中華」という世界観＝統治理念の崩壊の端緒を図らずも提示しているように思われる。「近代的道徳観」を有していたホールによって評価された琉球の「近代的・普遍的なるもの」の萌芽は、その後「近代的道徳観」を習得したと自負する日本によって「無残にも失われ」「抑圧され枯渇してしまった」ことは、ひとり琉球にとどまらず、北東アジア地域の多くのネイションが共通して経験することになる悲劇であった。

石田徹「近世対馬における異国船来着とその対応―対馬宗家文書から考える「北東アジア」」は、ロシア、朝鮮、日本の接壌地域にある対馬から、『対馬宗家文書』をテキストとして、近世対馬に生活した人びとが考えていた「地域」概念について考察したものであ

る。石田先生によれば、「對馬海邊江前々より異國船襲来漂着之書付」に収録された894年から1829年までの65件の異国船襲来漂着の記録から、対馬の人々が実際に感じていた「異国」とは蒙古から東南アジアまでであり、それは「船の出港地に応じて、唐、オランダ、琉球、朝鮮とそれ以外の５つに分ける」ことができるという。そして、19世紀前半頃の対馬において異国船来襲といえばまず「蒙古」が想起され、高麗朝鮮は異国船の範疇から外されていたが、次第にロシアやイギリスなどの西洋船が「異国船」として認知されていくという。

朝鮮通信使や朝鮮人漂流民送還の中継地であった対馬にとって、近代化胎動期に頻発したロシアやイギリスからの船の漂着は、それ以前の異国＝国際認識を変容させ、元寇の「蒙古」と西洋人であるロシアやイギリスが「襲来」して来る異国船として認識されることになった。ここにはすでに「大中華」という世界観＝統治理念の影響すら感じられない。近代日本の軍事要塞としてその後大きな変貌を遂げる対馬にとって、近代化胎動期における「大中華」という清朝中国のプレゼンスは、目前に位置する朝鮮やロシア、さらに押し寄せる西洋の前では、ほとんど意識すらされない存在だったように思われる。

琉球や対馬という北東アジアの南北に位置する接壌地域は、「大中華」の影響力の減退と押し寄せる西洋列強＝近代化の潮流の中で、それ以前の価値観や世界観が根本から崩壊する危機に直面していたと考えられる。

７．課題と今後への展望

今回収録した重厚な諸論考によって、各国・各地域が近代化胎動期に直面している問題を明らかにすることができたと考える。今回浮上してきた重要な観点として、①北東アジア地域を移動する人々（移民や商人）の存在、②「大中華」という世界観＝統治理念に保護下にあったからこそ、彼らは領域内において自由に交流や移動をすることが可能であったこと、そして ③「大中華」の東の辺境にあった朝鮮と日本の間に「大中華」の正統的学問であった朱子学をめぐるナショナリズムの攻防が生まれ、それがひいては日本に国家宗教や国家神道というナショナルな政治宗教運動を生み出したこと、最後に ④琉球や対馬という接壌地域は、「大中華」という世界観＝統治理念が霧消するほど、すでに大きな政治的変動の渦中に飲み込まれていたこと、の４点を指摘しておきたい。

北東アジア地域における近代的空間の形成を考察する本プロジェクトは、来年度いよいよ「北東アジア：近代化の始動」をテーマとする考察に移行する。近代化胎動期における「大中華」たる清朝中国の衰退と、大日本帝国という「近代的国家」の建設と北東アジア地域への政治的、軍事的、経済的、文化的プレゼンスの増大は、この地域にどのような変容と動揺をもたらして行くのだろうか。押し寄せる西洋列強の侵入と征服の中で、北東アジア各国はどのような近代的空間を構想し、実際にどのような近代的空間を構築することになるのか。

ともすれば、研究者は個人の専門領域にとどまりがちだが、「北東アジア地域」という広大な領域における歴史変動をつねに意識しながら、各自の専門領域に立ち返って「近代的空間の形成」という歴史的動向を考える往復運動こそ、今後４年間の考察で忘れてはならないことである。